

ある問題

ヘンリー・ジェイムズ 著

A Problem

by Henry James

李 春 喜 訳
LEE Haruki

Henry James's "A Problem" was written in 1868 when he was 25 years old. This story is about a couple, Emma and David. During their honeymoon, they are given prophecies by an Indian woman that say the couple will be blessed with a girl, but the girl will become sick and die. Although Emma and David don't believe what the Indian woman says, their girl really becomes sick, and later in her life, she dies.

Like in the famous stories such as Oedipus and Macbeth, prophecies become reality because they are made; in other words, humans cannot help making them reality. At the end of the story, the couple has overcome their difficulties, and they "marry twice," which is also a prophecy given them before they meet.

This story was written when Henry James was still in his apprenticeship, and one of his stories that explore "private lives and personal relations." It seems that he took advantage of one of those master plots of the narrative world; i.e. a prophecy story.

キーワード

Henry James (ヘンリー・ジェイムズ)、Short Story (短編)、A Problem (ある問題)、Translation (翻訳)、Prophecy (預言)

九月も終わりに近づいていた。それと同時にこれから読者の皆さんに関心を持ってもらおうと思う二人の若者の新婚旅行も終わりに近づいていた。暦を一顧だにもせず彼らはその月をできる限り引き伸ばしていたのである。九月が三十日までであることはどんな単純な子供でも知っている。しかしこの二人の若者はそれを四十日にしていた。しかしながら、大体において彼らは、その序章が終わるのも、自分たちが主役を演じることになる舞台の幕が上がるのを見るのも、残念には思っていなかった。エマは、彼女を待っている小さな町の住まいや母親が雇う

と約束してくれた使用人のことについて何度も思いを馳せた。また、母親が食料で一杯にしてくれるであろう戸棚の食品の様々な種類についても自分の想像力を自由に飛び回らせていた。また、ウェディングドレスを田舎に持ってくるのは馬鹿げていると考えそれを家に置いてきたのだが、絹の薄紫の色合いや裾の正確な長さについて記憶を新たにしたい強い衝動を感じた。読者の皆さんはエマが単純で洗練されたところのない人物であることがお分かりになるであろうし、彼女の結婚生活がささやかな喜びと悩みごとで構成されていることを知るであろう。彼女は単純でやさしく、可愛いくて若かった。彼女は夫をこよなく愛していた。彼もそろそろ真剣に結婚生活を始める時期だと感じ始めていた。彼の気持ちは、彼の仕事部屋や空いたままになっている机や、彼がいない間に来た手紙を開けておいてくれと同僚に頼んでおいた手紙の中身に戻りつつあった。デイヴィッドも単純で飾らない人物だった。彼は自分の妻が最高に美しい女性だと思っていたが——あるいはまさにそうだからこそ——人生は、怠けていると大挙して押し寄せてくる苦々しく残酷な日々の避けがたい雑事と危険とに満ち溢れていることを忘れることができなかった。要するに、彼は幸せだった。そして、これ以上何の努力もせずに幸せを手に行っていることが正しいこととは思えなかったのである。

そこで、二人は再び荷物をまとめて、明日の列車に間に合うように乗り物を頼んだ。夕闇が迫っていた。エマは両手に何も持たず窓に腰掛け、二人の若い愛の秘密を招き入れた風景に静かに別れの挨拶をしていた。彼らは木々の陰に腰を下ろし岩という岩の上から日が沈むのを眺めていたのだった。

デイヴィッドは、宿の主人への支払いと、雨上がりの草地の上に三時間も座っていたためにエマが風邪を引いたときに大変お世話になった医師のところへお別れの挨拶に行っていた。

一人で座っているのは退屈だった。エマは長い窓の枠をくぐって夫を探しに庭の門まで出てきた。医師の住まいは一マイルほど離れており村に近いところにあった。デイヴィッドの姿は見えなかったので、ショールだけを羽織り帽子もかぶらず彼女は道路に沿ってぶらぶらと歩いて行った。美しい夕暮れだった。それを伝える相手がいなかったのでエマは少し熱を込めて自分自身にそのことを伝えた。さらに、等しく独創的で雄弁でかつ等しく誠実な発言を一ダースほども自分に対してしたのである。ああ、デイヴィッドは何て素晴らしいのでしょうか。私は幸せになるに違いないわ。心配なこともたくさんあるけれど、規則正しく生活し節約し用心深くするのだわ。私の住まいは慎みのある気品と素晴らしい趣味の聖なる場所となり、そして私は母親になるのだわ。

ここまできたとき、エマは、取るに足りないことを自分の良心にささやいたり、瞑想に耽けたりすることをやめた。彼女は嬉しかった。彼女は歩みをさらに落とし、夕日に輝く西の空を背景にやわらかくうねるように盛り上がる暗い丘を見わたし、森や茂みや池のほりから聞こえてくる長く脈打つような音に耳を傾けた。彼女の耳は音で満たされ目は涙であふれた。

そうこうするうちに彼女は半マイルほど歩いたがデイヴィッドの姿はまだ見えなかった。し

かしながらこの瞬間、探し求めていたものから彼女の関心がそれた。彼女の右手には道路と同じ高さで草地と空き地が半分ずつの広い円形の土地が広がっていた。その土地の後方は一本の木で包まれていた。少し離れたところにあるその木の近くで、木の皮で作った籠や小物を売るインディアンの浮浪者が住むようなテントが二つ張ってあった。道路に近いところで若いインディアンの女性が二人の子供をそばに置きながら丸太に腰をかけて籠を編んでいた。エマは近づいて彼女を興味ありげに見た。

「こんばんは」とその女性はこわばった黒い目で見つめ返した。「何かいらないかい？」

「何があるの？」エマは立ち止まりながら尋ねた。

「何でもあるよ。籠でも針刺しでもうちわでも。」

「可愛いのがあれば籠が一つ欲しいわ。小さな籠が。」

「ええ、可愛いのがあるよ。ほら。」彼女は自分たちだけが使う言葉で一人の子供に何か言った。男の子は言いつけに従ってテントに向かって行った。

少年が何か取りに行っている間、エマはもう一人の子供を見て、とても男前ねと言ったがその子をさわりはしなかった。とても不潔だったからだ。その女性はエマを足先から頭まで調べ、彼女のドレス、手、指輪などを眺めていた。

しばらくすると、紐でつながれた籠をいくつも持って男の子が戻ってきた。見たところ最初の女性の母親だと思われる年老いた女性がその後からついてきた。エマは籠を調べ可愛いのを一つ選び代金を払うために財布を取り出した。一ドルだったが、エマは二ドル紙幣より他に細かいお金を持っておらず、その女性はおつりが無いと言った。

「その子にそのお金をおやり。その分私が運勢を占ってあげるよ」とその年老いた女性は言った。

エマはためらいながらその女性を見た。日焼けした顔に無数の皺が刻まれた陰鬱な黒い目をした胸の悪くなるような老人だった。

若い女性はエマが少し怯えているのを見て、耳障りな彼女らの言葉で年老いた女性に何か言った。老女が何か言い返すとその女性は突然笑った。

「手をお貸し。運勢を占ってあげるよ」と老女は言った。エマが抵抗する間もなしにその老人はやってきてエマの左手を取った。手の甲を上向きにし、その白い表面と薬指のダイヤモンド見ながらしばらくその手をつかんでいた。それから手のひらを上向きにし何かぶつぶつとつぶやき始めた。ちょうど彼女が何か言いかけたとき、彼女がエマの後ろの誰かを半ば挑むように見つめるのに気がついた。振り向くと夫がこちらに気がつかずに近づいてくるのが見えた。エマはホッとした。老女は恐ろしく悪意のある目つきをし、ウイスキーの匂いが強くする息を吐き出した。

「彼女は何をしているんだい？」彼は妻に尋ねた。

「わからないの？私の運勢を占っているのよ。」

「それで何て言ってるんだい？」

「まだ何にも。お告げが来るのを待ってるようだよ。」

インディアンの女性は必ず賢そうにデイヴィッドを見つめ、デイヴィッドは不快感を上手に隠したとはいえ目つきでインディアンの女性を見つめ返した。「さぞかし時間がかかるだろうさ」と彼は妻に言った。「酔っぱらっているのさ。」

彼は声を低くしたつもりだったが、彼の言っていることが聞こえた。娘の方が笑って自分たちの言葉で母親に何か言った。母親は依然エマの手をつかんだまま黙っていた。

「これはあんたの旦那かい？」ついに彼女はデイヴィッドの方にうなずきながら言った。

エマはうなずいた。女性はふたたびエマの手を調べた。

「今年中におまえさんは母親になるだろう」と彼女は言った。

「それは素晴らしい知らせだ」とデイヴィッドは言った。「男の子かい？それとも女の子かい？」

インディアンの女性は強くデイヴィッドを見つめた。「女の子さ」と彼女は言った。それから彼女は視線をエマの手のひらに移した。

「どうかしら？それで全部かしら？」エマは言った。

「その子は病気になるだろう。」

「そうだろうさ。そして僕たちは医者呼びにやるんだ」とデイヴィッドは言った。

「医者は何の役にも立たないだろう。」

「それでは別のお医者さまを呼ぶわ。」エマは笑いながら言ったが、努力が要らないわけではなかった。

「その医者も何の役にも立たないだろう。その子は死んでしまうのさ。」

インディアンの娘はまた笑い始めた。エマは手を引っ込めて夫の方を見た。夫は少し青ざめていたがエマは夫の腕に自分の手を入れた。

「その知らせには大いに感謝するよ。それで僕たちのかわいい娘はいくつで死んじゃうのかな？」デイヴィッドは言った。

「ああ、それはとても幼いうちにさ。」

「どのくらい幼いうちだい？」

「とても幼いうちに。」老女はそれ以上のことははっきりさせたくないようだった。デイヴィッドは妻を自分の方に引き寄せた。

「ねえ、十分一ドル分の価値はあったわね」とエマは言った。

「彼女は十分一ドル分を稼いださ。まったく酔っぱらっているのさ。」

このように夫に勇気づけられてエマは丸一日安心していった。一方デイヴィッドは一時間ももしないうちに予言のことはまったく忘れてしまっていた。

次の日彼らは町に戻った。エマは自分の住まいがまったく思い望んでいた通りであることを

知った。絹の薄紫色は少したりとも薄すぎることはなくドレスの裾は一インチたりとも短くはなかった。冬が来て冬が去ってもエマは依然として幸せな女性であった。春が訪れ夏が近づいていた。エマの幸福は増した。女の子の母親になったのである。

子供が生まれてからしばらくの間エマは部屋から出なかった。子供を膝の上に乗せてあやしては呼吸の回数を数えたり可愛い子になるだろうかと考えたりしていた。デイヴィッドは頭の中を数字で一杯にしながらか仕事に没頭していた。エマは幾度となく老婆の予言を思い出した。恐怖で怯えるときもあれば無関心でいられるときもあった。また挑戦的な気持ちになるときもあったが、しばらくすると、あんなことを思い出さなんて馬鹿げているわと気持ちの整理をつけてしまった。酔っ払いのインディアン女だなんて——私の大切な子には格好のお告げだわ。それにあの女はもう死んでしまったに違いない。それにしてもあの女の予言は妙だわ。とても自信ありげだった。そしてもう一人の女は嫌な笑い方をしていたわ。エマはあの笑いを忘れてはいなかった。あんなに丈夫そうな子がそばにいるのだから笑うのも当然ね。

エマが初めて部屋を出た日の夕方、食事のときエマは夫にインディアンの予言を覚えているかどうか聞かすにはいられなかった。デイヴィッドはグラスでワインを飲んでいて。彼はうなづいた。

「ねえ、半分は当たったのよ。女の子だわ」とエマは言った。

「おやおや、人が聞いたら君はあの予言を信じているのだと思うよ」とデイヴィッドは言った。

「もちろんこの子は病気になるわ。そのことも覚悟しなきゃいけないわ。」

「ねえ、この子が女の子なのはあのありがたい人物がそう言ったからだと思っているのかい？」デイヴィッドは続けた。

「そんなことないわ。単なる偶然よ。」

「そうだろう。それが単なる偶然ならそれはそのままにしておこう。もしあの女のお告げが本当のお告げだとしてもそれはそのまま放っておこうじゃないか。半分当たったということはあとの半分が当たる可能性が低くなるということさ。」

読者の皆さんはデイヴィッドの理屈にはおかしいところがあると思われるかもしれないが、エマにはそれで十分だった。彼女は一年間それを信じて暮らした。一年後それは試されることになった。

あの老婆の予言のせいでエマが娘を必要以上に保護したりかわいがったりしたということはない。エマの自然の愛情それ自体が完璧な用心を保証するものだった。しかし完璧な用心は誤ることがないとは限らない。娘が十二ヶ月になったとき、娘は重い病気にかかった。一週間の間小さな命は細い糸でかろうじてつながれているだけだった。この間、エマは幼い子の頭上にかかげられたあの悲しい予言のことをまったく忘れていたに違いない。少なくとも、彼女はそのことを夫に話さなかったし、夫はそのことを彼女に思い出させるようなことは何もしなかつ

た。ついに、激しい戦いの後、幼い子供は病魔の残酷な手から逃れることができた。息も絶え絶えで疲労困憊していたが無傷だった。エマはまるで自分の子が不死身であるかのように、また、これからはこの子の人生には試練が訪れることがないように感じた。そのときになって初めて彼女はもう一度あの色の黒い女予言者のことを考えたのだった。彼女は部屋でソファに腰かけ、やつれた頬に戻りつつある生命のかすかな輝きを眺めながら膝の上で娘を寝かしていた。デイヴィッドが仕事から帰ってきて彼女のそばに腰かけた。

「あのマガビスカ ― 何という名前だったかしら ― は何て言うでしょうね」とエマが言った。

「あの女は恐ろしく侮辱されたと思うだろうね、あの立派な予言者さまときたら」とデイヴィッドは答えた。デイヴィッドは自分の口髭の端で娘の鼻の先をやさしくくすぐった。赤ん坊はそっと目を開け、かすかに父親の存在に気がついたのか、手を伸ばしてけだるそうに父親の鼻をつかんだ。「こりゃすごい。まったくお転婆な子だ。もういつもの元気を取り戻しているぞ。」

「あら、デイヴィッド何ていうことをいうの」とエマは言った。しかしそう言いながらエマは穏やかながらも大変嬉しそうに微笑みながら夫と子どもを眺めていた。次第に彼女の微笑みが少しこぼれ、彼女の表情から微笑みが消えた。それでも、事実そうであるように彼女は幸せな女性に見えた。赤ん坊を受け取るために乳母が食事を済ませて上がってきた。エマは乳母に赤ん坊を渡してソファに座っていた。乳母が隣の部屋に行ってしまうとエマは夫の手の上に自分の手を置いた。

「デイヴィッド」とエマが言った。「私ちょっとした秘密があるの。」

「君には十もの秘密があってもおかしくないさ」とデイヴィッドは言った。「君は僕が出会った中で一番秘密と謎の多い女性だよ。」

言うまでもなくこれはデイヴィッドのいつものユーモアだった。というのは、エマは考えていることがすぐに顔に出る隠し事のできないタイプだからだ。彼女は目立たないながらも献身的に夫に尽くした。夫を自分にとって何でも話せる相手にすることが彼女の生きがいの一つだった。しかし実際には夫に打ち明けなければならないことなど彼女にはほとんどなかった。それでも彼女は、彼には彼女が聞くと嬉しくなるような考えがたくさんあることが分かって、いつの日か彼がそれを彼女に話してくれることを望みながら、自分の乏しい経験について話すのだった。

「秘密というわけじゃないのよ」とエマは続けた。「でもあまり長い間話さないでいたので秘密にしていたような気がするの。デイヴィッド、きっと私のことをお馬鹿さんだと思ってよ。あの恐ろしいお婆さんの言ったことが本当に起こるんじゃないかって思っていたものだから長い間言えなかったのよ。でも、もうそれが起こり得ないということがはっきりしたから心に留めておくのがばかげているような気がするの。いつもそのことを感じていたわけではないの

よ。何も言わなかったのはあなたのことを思っていることなの。あなたがそんなことを気にしないのはわかっていたし、あなたが気にしないのなら私も気にする必要がないでしょう、デイヴィッド。」

「おいおい、一体何が出てくるんだい？」デイヴィッドは言った。「『あなたが気にしないのなら私も気にする必要がないでしょう』だって！背筋がぞっとするよ。」

「もう一つの子言のことなの」とエマは言った。

「もう一つの子言だって？それはどんなことがあっても聞かなきゃ。」

「でも、まさかデイヴィッド、信じるつもりじゃないでしょうね？」

「それは内容によるさ。自分に都合のいいことだったらもちろん信じるさ。」

「自分に都合がいいですって！何ていうことを、デイヴィッド！」

「ねえエマ、予言を馬鹿にしちゃいけないよ。この子についての予言を考えてごらんよ。」

「この子のことでしょ。」

「そのとおり。この子は女の子じゃないのかい？死の淵をさまよわなかったかい？」

「そのとおりだわ。でも、あの女がそうさせたのよ。」

「そうじゃない。考えてもごらんよ。もちろん、すんでのところで助かったけれど、その間僕たちは十分ハラハラさせられたよ。」

「そんなに予言を信じる気になっているのがっかりさせちゃ悪いわね。もう一つの子言についても話しちゃうわ。」

「今度のもインディアンの老婆なのかい？」

「違うのよ。イタリア人のお婆さんなの。毎週土曜日の朝に学校にきてお菓子やちょっとした飾りものを売っていたの。十年も前のことだわ。先生方はその女性を嫌っていたんだけど、私たちが裏口から庭に入れてあげていたの。町で物を売っている人みたいに小さなお盆を持っていたわ。キャンディやケーキや手袋を売っていたのよ。ある日、カードで私たちの運勢を見てくれるとってお盆の上にカードを広げたの。私たちの半分くらいが見てもらったわ。あの子たちは怖がってたわ。私は二番目だったと思うけど。彼女は何かくだらないことを長々と話したわ、もう忘れてしまったけど。でも、恋愛や夫のことは何も言わなかったの。もちろん、みんなそのことを聞いたかったのよ。私はがっかりしたけど恥ずかしくて聞けなかったの。私のあとに見てもらった女の子たちはみんな素晴らしい結婚をするって言ってもらっていたわ。私は一生お嫁に行けないのかしらと思うとその考えがとても恐ろしいことのように思えたの。それで覚悟を決めて自分の運命を聞いてみたわ『私は結婚できないの？』って、彼女はカードをしまいかけていたけれど。彼女は私の方を見て、もう一度カードの方を見たわ。自分がうっかりしていたことを埋め合わせたかったのだと思うの。『あら、お嬢ちゃん、あなたは他の誰よりも幸せになるわよ。あなたは二度結婚するのよ！』さあ、どう？」エマは言った。「もう一度結婚してみる？」彼女は夫の肩に頭をもたせかけ微笑みながら夫の顔をのぞき込んだ。

デイヴィッドは笑っていなかった。それどころか難しい表情をしていた。エマからも微笑みが消え重々しい表情になった。実際、彼女は沈痛な面持ちだった。彼女のたわいもない話をそんなに深刻に受け取るなんてひどいと思った。

「とても妙な話だ」とデイヴィッドは言った。

「とてもばかばかしい話よ。ごめんなさい、変なこと話しちゃって」とエマは言った。

「とても嬉しいよ。とても不思議なことじゃないか。ねえ、エマ、僕も秘密にしていたことがあるんだ。」

「いいえ、聞きたくないわ」とエマは言った。

「聞かなきゃいけないよ。今までこの話をしたことなかったのは単に忘れてしまっていたからなんだ。すっかり忘れていたよ。でも、君の話を聞いて思い出したんだ。僕も一度運勢を見てもらったことがあるんだ。インディアン女でもなかったしジプシーでもなかった。たまたまいた女性の一人だった。名前は忘れてしまったよ。まだ二十歳になる前だったと思う。何かのパーティーで彼女は人の運勢を占っていたんだ。カードを持っていた。贈り物としてもらったふりをしていただけね。僕は何をしゃべっていたのか忘れたけど、あのくらいの年頃の男によくあるように、結婚生活をからかっていたのだと思う。一人の女性が僕をその女性に紹介したんだ。ぜったい結婚しないって言っている男性がいますってね。本当かしら？その女性はカードを見て、まったく事実と違っている、僕は二度結婚するって言ったんだ。その場にいた人たちがいっせいに笑って僕は恥をかいたんだよ。『二度結婚するって言ったらどうだい？』と僕が言うと、『カードには二度と出ていますわ』とその女性は答えたよ。」デイヴィッドはソファから立ち上がって妻の前に立った。「不思議だと思わないかい？」デイヴィッドは言った。

「ええ、不思議ですわ。あなたはそのことを何か不思議なこと以上のことだと考えていらっしやるようですけど。」

「僕たちが二人とも二度結婚するなんてあり得ないことはわかってるだろう？」デイヴィッドは続けた。

「『わかってるだろう？』ですって」とエマは叫んだ。「まあすてき。『わかってるだろう？』とは素晴らしいわ。多分私が退場してあなたにチャンスを与えることを望んでいらっしやるのね。」

デイヴィッドは、妻の口調の激しさに半ば驚いて妻を見つめた。彼はその場を取り繕うために何か言おうとしたが、二人が同じ予言をされていたことの偶然にあらためて驚いたようだった。「おやおや！こんな変な話ってあるだろうか！」彼は突然笑い出した。

エマは顔を両手にうずめて黙っていた。それからしばらくしてエマは言った。「私にとっては極めて不愉快なことです！」話そうとする努力に圧倒されてエマは泣き出した。

夫は再び妻の横に座った。不謹慎なことかもしれないが、彼はまだこのことを滑稽なことだと考えていた。「さあ、エマ。涙をお拭き。よく思い出してごらん。以前結婚していたこと

はないかい？」

エマは彼の愛撫を振りほどいて立ち上がった。そして、突然振り向いて激しく言った。「あなたはどうなのかしら？」

答える代わりにデイヴィッドは再び笑った。そして、一瞬妻を見つめながら、立ち上がって妻の後を追った。「一体ゼンたい嫉妬というのはどこに隠れているのかね？」と彼は叫んだ。彼女の体に腕を回すと妻が応じたので口づけをした。このとき隣の部屋から幼子の小さな泣き声がしたので、エマは急いでその場を離れた。

デイヴィッドが疑問に思ったように、嫉妬は一体どこに隠れていたのだろうか？嫉妬は最もありそうにない場所で姿を現すのだろうか？嫉妬は何も知らないエマの心に巢食い、暇にまかせてエマの心を飾り立てたのだ。

私が今描いた二人のちょっとしたやりとりのあと、二人の気持ちはまったく変わってしまった。デイヴィッドは妻にキスをして、涙を流しても意味がないことを訴えたが、自分の話は撤回しなかった。彼は十年間そのことを考えたこともなかったが、思い出した今となっては頭から追いつくことができなくなっていた。そのことがひっきりなしに彼を攻め悩まし混乱させるのだった。それは最も都合の悪い瞬間に押しかけてきては、耳の中でブンブンと音を立て、彼の帳簿の数字の中で踊るのだった。ときにはあの若い女性の予言が途方もない数字の列と一緒にあって、比較的小さな数字から何十万という数字の列に紛れ込むこともあった。デイヴィッドは何百回となく自分は夫であると言い聞かした。しかし結局のところ、不思議なのは、あの若い女性が言ったように彼が二度結婚する運命になっているということではなく、エマもまったく同じ運命を引き当てたということだった。それは神託の矛盾だった。もちろん、今となっては実行に移すことなどできないが、どちらの神託が正しいのか検証してみるの面白試みだっただろう。一体どうして両方が真実であることができよう？相互に相容れないことは最大限の知恵をもってしても調停することはできない。どちらかの予言者が比喩的な言い回しをしたということは考えられるだろうか？デイヴィッドには、そのように考えることは彼女たちに実際以上の能力を認めることになるように思えた。そのことには思い及ばなかったのだが、最も単純な解決策は、デイヴィッドにはできなかつただろうが、二人が結婚したときお互いの予言がお互いの予言を無効にし、デイヴィッドがエマの夫になったときに、彼らのでたらめの予言はその効力を失ったと考えることだ。

この問題を軽く考えることなどエマには不可能だった。昼も夜も一ヶ月間彼女はこのことばかり考えていた。当然、どちらかにとって二度目の結婚など非現実的だと考えていたが、二度目の結婚が現実には起こるとしたらどちらに起こるのか知りたかった。インディアンのはばかばかしいと笑いとばすことができたが、彼女とデイヴィッドについての予言の偶然の一致を笑いとばすことはできなかつた。理屈に合わない馬鹿げたことであるということが一層そのことを痛々しいものにしていった。彼女の人生は恐ろしく不安定なものになった。あの馬鹿げた二

人のイカサマ師のたわごとが実現するかどうかが彼女にとってまるで大きな問題になってしまった。陰鬱な雲が彼らの結婚生活に立ち込めていた。まっとうな若い夫婦がなぜそのような妙なことを言われなければならないのか？なぜそのような解説不可能な謎にめぐり会うことになったのか？エマは自分の秘密を話してしまったことをひどく後悔した。しかし、デイヴィッドが自分の秘密を話さず、あんなにひどい出来事を心の中にしまい込んだままにしていたら、彼女の人生と運命にどんなに不吉なことが起こっていたかもしれないと思うと嬉しくもあった。今ではもうそのことは忘れてしまい気にならなくなり笑いとばすことができた。そしてデイヴィッドも彼の不可思議な予言について笑いとばし忘れ去ることができた。エマの想像力がこんなにも活発になったことはなかった。考え得るあらゆる限りの角度から二通りある自分の運命について考えてみた。デイヴィッドが自らの宿命の重圧に屈して彼女を去り、彼女が自由に再婚できる可能性を想像してみたり、彼が神託に従うという考えにとり憑かれ、激しく乱暴な意思によって彼女を押し潰してしまうことを考えてみたりした。あるいはまた、まるで自分の意思がとても強いもののように思い運命の力によって守られているかのように感じるのだった。言うまでもなく愛は豊富にあった。しかし、運命はそれ以上にあった。それでは愛のない運命とは一体どんなものなのか？デイヴィッドを愛したようにエマは別の男性を愛することになるだろう。彼女の未来の主人を呼び出そうと貧しい自分の想像力を痛めつけた。正直に言ってそれはあまり成功したとは言えない。デイヴィッドを忘れることなどエマにはできなかったが、それにもかかわらず彼女は罪悪感を感じた。彼女はデイヴィッドのことを考えた。彼も罪悪感を感じるのかしら。彼も別の女性を夢見ているのかしら。

こうしてエマは嫉妬深くなった。彼女が頭の切れるタイプでないことは否定しないし、彼女がいささか単純な頭脳の持ち主であることはすでに申し上げた通りである。かつて夫に対して持っていた率直な信頼の強さに比例して、現在の突拍子もない考えと疑いの念は強くなるのだった。

エマが嫉妬深くなった瞬間から、家庭の平和を司る天使はその無傷の翼をはためかし憂鬱な飛行に飛び立った。エマはすぐに感情をあらわにし、夫が自分に関心を示さず、他の女性と一緒にいることを好んでいると言って責めるのだった。一度、彼女は夫に、したいようにすればいいとさえ言った。それは二人が招待された夕食会についてのことだった。その日の午後、デイヴィッドがまだ工作中に娘の具合が悪くなった。エマは、今晚はお伺いすることができないというメモを書いた。デイヴィッドが帰ってきたとき彼女はメモのことを話した。彼は笑って、赤ん坊の世話をしているのは僕だと思われるじゃないかと言った。彼は予定通り出かけるつもりだと言って九時に着替えて出てきた。エマは顔色を変えて憤然として彼を見つめた。

「結局、あなたが正しいのだから。楽しんでいらして」と彼女は言った。

それは恐ろしい発言だった。当然、その発言のあと夫婦の間に大きな溝ができた。

ときどきエマは復讐したい衝動に駆られ、人のお付き合いや、感じの良い男性の心遣いと

同情に幸せを求めたくなる衝動に駆られた。しかし彼女はあまり大きく踏み出さなかった。そのような幸せは胸騒ぎのする安らぎにすぎないように思えた。それに、彼女は夫との折り合いがうまくいっていないのだと世間が疑う理由もなかったのだ。

しかし、デイヴィッドの方はかなり踏み出していた。彼はもの静かであまり外出しない愛情深い男性から、好みにうるさく神経質で落ち着きがなく、クラブや劇場によく出入りし外で食事をする男性へと徐々に変わっていった。彼の生活にこれらのことが影響していることを感じ取ったときから、彼はあの二つの予言を軽く見るができなくなった。あるときは一方の、またあるときは別の方の予言が彼の想像力を支配し、いずれにせよ、それらの予言を知らなかったら過ごせたであろう生活をするのは今や不可能だった。時に彼は若くして死ぬことを考えて、この世界に対する情熱的な愛着と、快樂の世界に飛び込んでみたいという抗い難い欲望にとられることがあった。またあるときには、妻の死の可能性や彼の妻という立場が他の女性に取って代わることを考えて、人生の進展に対するさらなる遅延に激しく不自然なほどいらいらした。彼は現在を消滅させたいと願った。激しい期待と興奮状態の中で生きることは生きることではない。あわれなデイヴィッドは時間をやり過ごすためにときに自暴自棄になった。彼は人生の一側面から別の側面へと絶え間なく振れ動き、情熱的な高揚から激しく病的に落ち込む絶え間ない変調が、ほとんど狂気ともいえる慢性的な興奮状態を誘発した。

ちょうどその頃、デイヴィッドは若い未婚の女性——ここではジュリアと呼んでおこう——と知り合った。とてもチャーミングで善良な女性で、デイヴィッドの混乱した気持ちを落ち着かせ慰めるような性格の女性だった。しばらくして、彼は家庭内で発生した異変について彼女に話すようになった。最初、彼女はこの話をとても楽しんで聞いていた。そして、彼を非現実的で子供っぽく迷信的だと言って笑った。しかし、彼女があまり真剣に受け止めないことに彼がむっとしたので、彼女は作戦を変更することにして、彼の思い込みに同調することにしたのである。

しかし、彼の問題は彼女には深刻なように思えた。そして、もし彼の気持ちが妻から離れていくのを食い止める算段が何かなされなければ、夫婦双方から永遠に幸せが失われることになるかもしれない、この夫婦の不思議な未来についてのばかばかしい予言は二人の仲直りによってのみ解消されるだろうとジュリアは考えていた。夫婦の愛が失われたとは考えられなかった。ただ休眠状態にあるだけなのだ。彼女が一旦その愛の眠りを覚すことができれば、今度はその愛に家庭を任せ、彼女は軽い気持ちで立ち去るのだ。

そこで、デイヴィッドには彼女の意図を知らせずに、エマとの面識はなかったがジュリアは思い切ってエマのもとを訪ねた。ジュリアは何を話せばいいのかわからなかった。その場の思いつきを当てにするつもりだった。彼女はたんに暗い影が忍び寄った若い夫人の家庭に希望の光を灯したかっただけなのだ。エマは単純で感じやすい女性に違いない。ジュリアの親切な申し出にすぐ心を動かされるだろう。

しかし、ジュリアはエマと面識はなかったが、エマの方はジュリアについてかなりよく知っていた。エマは街中でジュリアを紹介されたことがあった。ジュリアは美しい女性だった。エマはジュリアを嫌っていた。彼女はジュリアが夫を誘惑しようとしているのだと考えていた。エマは、ジュリアと夫は二人が結婚できるように彼女が死ぬことを望んでいるに違いないと確信していた。おそらく夫はもう彼女と関係を持っているに違いない。多分、彼女を殺すことができれば二人は嬉しいだろう。というわけで、優しく悲しみに沈んだ感じやすい女性に会うはずが、ジュリアがそこで出会ったのは、侮辱と屈辱感で怒りに震えた不愉快で横柄な女性だった。エマにとってジュリアの訪問は無礼の極みだった。エマはジュリアの話を書くことを断った。ジュリアの礼儀正しさや優しさや思いやりはエマには下心のある策略にしか感じられなかった。我慢ができなくなったエマはとうとう彼女に言ってはならないことを言ってしまった。

しかしジュリアも芯の強い女性だった。気持ちが高ぶった彼女は自らの矜持のためにエマに言い返した。しかし、その言葉は意図せずデイヴィッドを傷つけることになってしまった。「奥様、私は、あなたが愚かな女性だということを常々否定してまいりました。しかし、どうやら私は間違っていたようです。」

そう答えたジュリアはエマの家を出た。ジュリアが家に残ろうと出て行こうとエマには問題ではなかった。エマはデイヴィッドが彼女のことを他の女性に向かって愚かな奴と呼んだことだけがひっかかっていた。「愚かな奴ですって？」エマは叫んだ。「確かに今まではそうだったわ。でももうこれからはそうは呼ばせませんからね。」

彼女はすぐに家を出る準備をした。デイヴィッドが帰宅したとき、エマと子供と召使がちょうど家を出て行くところだった。エマは、実家の母のもとに戻るつもりであること、デイヴィッドが不在の間に自宅で彼女を侮辱するために彼が人を使ったこと、彼女には自分の家族の中で自分の身を守る必要のあることなどを言葉少なに語った。デイヴィッドは何も言い返さなかった。妻の問い詰めに対して怒りをあらわにするということもなかった。すべてを覚悟していたのだ。それは運命だった。

エマは言った通り実家の母の家に戻った。デイヴィッドの家を出て、その後続いた何ヶ月もの隠遁生活の中でも、彼女は自分こそ誠実で貞淑であったという喜びに満ちていた。彼女は少なくとも貞節な妻であった。彼女は忍耐強く我慢強かったのだ。彼女の宿命がどのようなものであれ、彼女は恥じるような行いはしなかった。彼女はこれまで以上に娘に愛情を注いだ。彼女の生活の比較的落ち着いた自由はほとんど幸せと言っていいほどの感情を彼女にもたらしめた。彼女についてどのようなうわさが流されようとも、それと引き換えにして得られるやすらぎを手にしたとき、彼女の心に訪れるあの深い満足感を彼女は感じるのだった。少なくとも今の彼女の生活の中に偽りはなかった。彼女は彼女の結婚を尊重しなかったし、尊重するふりもしなかった。

デイヴィッドとは言えば、ほとんどジュリア以外の人に会っていなかった。ジュリアは、先に私が指摘した通り、非常に善良な気立てのいい女性であったし、彼女はエマに感じた憤りをすぐに忘れてしまった。ジュリアはデイヴィッドとエマが二人の関係を修復しても気にすることはなかった。ジュリアは力の限り良心的にデイヴィッドをまともで落ち着いた状態にしておく努力をした。「彼女は私のことを嫌っているかもしれないわ」とジュリアは考えた。「でも、私はエマのためにデイヴィッドを守ってあげよう。」言うまでもなく、この問題ではジュリアこそが一番聡明であった。

デイヴィッドは自分とジュリアとの関係について自分なりの考えを持っていた。「僕は会いたくだけ君に会うつもりだ」と彼は宣言した。「慰めが見つけれられるなら、それを手に入れるつもりさ。彼女には子供がいるし母親もいるじゃないか。なのに彼女は僕の友だちを妬むのかい？エマは僕が酒を飲んだり他の女性と遊び回ったりしないことを幸運に思うべきだよ。」

半年間デイヴィッドは妻にまったく会わなかった。ついにある夕方、そのとき彼はジュリアの家を訪ねていたのだが、次のような伝言を受け取った。

「今朝、娘が亡くなりました。数時間苦しそうにしていました。明日の朝、遺体を埋葬します。エマ。」

デイヴィッドはその伝言をジュリアに手渡した。「結局」と彼は言った。「あの女の言ったことは正しかった。」

「誰が正しかったと言うの？あなた」とジュリアは尋ねた。

「あの老婆だよ。何かを信じるには早すぎたということだよ。」

次の朝、デイヴィッドは義理の母の家を訪ねた。彼に気づいた召使が、埋葬の準備を済ませた娘の遺体を寝かせてある部屋にデイヴィッドを招き入れた。暗くなった窓のそばで、義理の母がある紳士——妻がお気に入りの牧師、クラーク氏だと思ふ——と話をしていた。デイヴィッドは彼が好きではなかった。デイヴィッドが部屋に入ると、彼女はとても丁寧にお辞儀——体を少し下げそれと同時に頭を上げる儀礼がこのような状況で相応しいとして——をした。そして、すぐに部屋から出て行った。デイヴィッドは牧師に軽く頭を下げて娘の小さな亡骸を見つめた。少しして、クラーク氏がデイヴィッドに近づいてきた。

「人生の大きな試練に遭われましたね」と牧師は言葉をかけた。

デイヴィッドは黙っていたが同じ気持ちだった。

「もしかすると」と牧師は続けた。「すべての試練がそうであるように、私たちが何かに依存しなければならぬ弱い存在であることを思い出させ、そして、傲慢と頑迷を取り払い、われわれが自らの心を求め、悪意に満ちた愚の雑草が知恵というささやかな花の息を止め圧倒することをわれわれの意志が許しはしなかったかを見つめ直すために、この試練は仕わされたのかもしれない。」

クラーク氏がこういう機会のことを考えて、この言葉を念入りに準備していたとは断言した

くない。彼のような任にある者はちょっとした感情の包みを手元に用意しているものだ。しかし、事の理由については知らなかっただろうが、エマが夫と仲たがいでいることはもちろん彼の知るところだった。しかし、純粋な気持ちの持ち主として、クラーク氏は、共通の悲しみを癒そうとする行為のもとで、かたくなな二人の心はまた一つに溶け合うのではないだろうかと思像した。「失うものが多ければ多いほど」とクラーク氏は続けた。「残されたものをより大切に重んじなければならないのです。」

「おっしゃる通りです」とデイヴィッドは言った。「でも、残念ながら私にはもう何も残っていないのです。」

そのとき、ドアが開いてエマが入って来た。青ざめた顔をして黒い服をまとっていた。夫がいるとは思っていなかったらしくそこに立ち止まった。しかし、デイヴィッドが彼女の方に振り向くと彼の方に向かってきた。

デイヴィッドはまるでたった今述べた彼の発言を取り消すかのように天国から天使が送られてきたように感じた。彼の顔が、初めは恥ずかしさで、次に喜びで赤くなった。彼は手を差し出した。エマは自尊心と戦いながら一瞬ためらい、牧師の方を見た。彼は敬虔深く神聖な身振りで手を上に動かした。そして、彼女は夫の首もとに倒れ込んだのである。

牧師はデイヴィッドの手を取りしっかりと握った。デイヴィッドは牧師のことが好きではなかったと述べたが、彼は気持ちを込めて牧師の手を握り返した。

「結局のところ」と二週間経ってジュリアは言った。というのも、この間に、エマは夫がこの女性との交友を続けることに同意していたし、彼女自身もこの女性がとっても素晴らしい人物だと思うようになっていた。「よく分からないのだけれど、あの恐ろしい問題はついに解決したのよ。そしてお二人は再び結婚されたのだわ。」